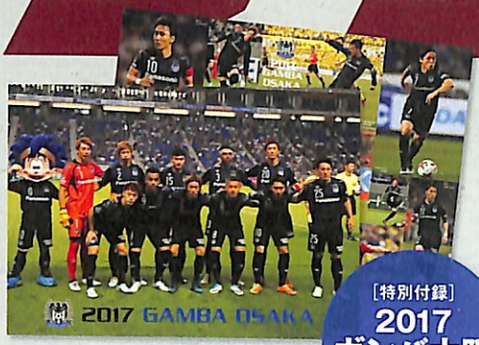
www.soccerdigestweb.com
SOCCER DIGEST
サッカーダイジェスト
2017年8月10日発行（毎月2回第2・第4木曜日発行）（7月27日発売）
第38巻第17号通算1389号昭和55年3月3日第3種郵便物認可
月2回刊
第2・第4木曜日発売

［特集］
1993-2017 Jリーグ最強助っ人ランキング



［特別付録］
2017
ガンバ大阪
ポスター

［クラブダイジェスト2017］
ガンバ大阪

INTERVIEWS
倉田 秋／三浦弦太×今野泰幸

［特集］
1993-2017
Jリーグ最強助っ人ランキング

2017
No.1389
8.10
付録とも定価580（税込）YEN

今季&歴代のベストプレーヤーをランキング形式で紹介!

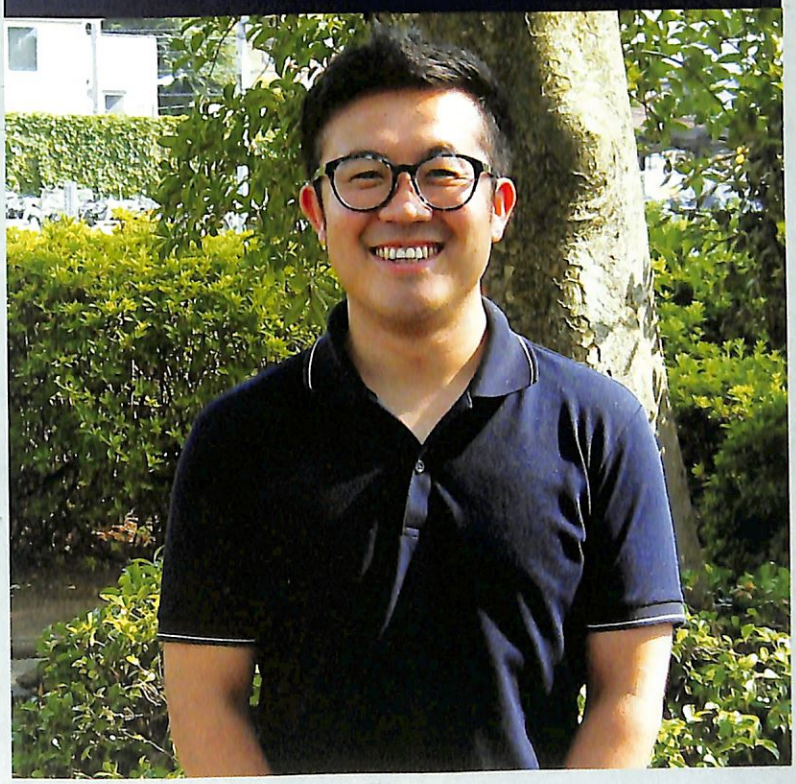
［検証企画］
ルーカス・ポドルスキの活用法

［連載］ルーツ探訪
東口順昭（G大阪／日本代表）

［インタビュー］
ペドロ・ジュニオール（鹿島）
酒井宏樹（マルセイユ／日本代表）

Jリーグからカナダへ 永住しての起業を決断 サッカー人たちを結ぶ 日本と北米の懸け橋に

FOOTBALL マイノリティリポート 連載



第12回

スポーツ語学留学エージェント 高尾真人（株式会社A to［エートゥー］）

価値あるマイノリティの取り組みを紹介する連載企画――。川崎フロンターレを辞めたのは、カナダで事業を興すため。日本との懸け橋となり、両国に恩返しをしたいと語る、高尾真人の見据える未来とは。

取材・文●手嶋真彦（スポーツライター）

サッカーをやり抜くと同時に使える英語を残すという提案

カナダの田舎町。通りすがりに見えてきたのは、くたびれた民家だった。庭には初老の男性がいる。着ているTシャツはボロボロで、クルマもおんぼろだ。MBAの取得を目指し、日本から留学していた23歳の高尾真人は、その光景に目を奪われた。男性が真っ昼間からビールを飲んでいたからではない。幸せそうだったのだ。経済的にはおよそ恵まれていそうにない。それでも庭いじりをしながら、本当に幸せそうにビールを飲んでいた。

「この価値観は日本にない。そう思った瞬間、ぶん殴られたような気分になって。もっといろんなモノサシが、日本にもあっていいのにと思うようになりました」

印象的なあの出来事から9年後の2017年夏、32歳になった高尾は準備を進めている。カナダに戻る日が近づいてきた。今度は留学ではない。現地で事業を興し、妻子と一緒に永住する覚悟を決めている。

高尾自身が様々な異文化に触れ、視野を大きく広げたカナダで、これからは日本人のチャレンジを手助けしていきたい。向こうに根を張り、自分にしかできないやり方で恩返しをしていきたい。お世話になったカナダへの、そして日本サッカー界への恩返しを――。

バイタリティ溢れる高尾は時機到来と、後ろ髪を引かれながらも川崎フロンターレに辞表を出した。大学時代の4年間は縁あってスクールを手伝い、留学を終えた後の7年間は裏方として携わったフロンターレから、自らの意思で未開拓のフロンティアへと飛び立っていく。

◇

高尾が起業を決断した背景には、近年の傾向への疑問がある。プロ志向の日本人選手がサッカーを続けられる場を国外に求め、ヨーロッパやアジアの下部リーグに溢れ出している。尊重すべき進路ではあるが、いよいよプロを断念となってからのセカンドキャリアに繋がらない実例を見聞きするたびに心が痛む。サッカーだけに専念するそうした国外下部リーグへの参戦は、経済事情の変化で突如解雇となるリスクや、大怪我に見舞われる不安も看過できない。

「その国の選手たちも、自分や家族の生活が懸かってますからね。日本人を含めた外国人選手には、特に激しく削りに行ったとしてもおかしくない。それが不幸な怪我を引き起こし、やむをえず日本に帰国。気持ちを含めて中途半端なまま、生きていくために就職する。実際にそんなケースもあります」

プロになる夢を諦め切れない日本の選手たちに、高尾が提案するのは、英語をセットにしたカナダへのサッカー留学だ。

「厳しい言い方をすると、日本で弾かれた選手たちですから、国外に行っても簡単にプロになれるわけではありません。だったら英語をしっかり学びながら、サッカーもとことんやればいい。諦め切れるまでサッカーをやり抜いて、その時に使える英語が残っていたら、それはそれで最高じゃないか。そんな提案です」

高尾が仲介するカナダの大学には、付属の語学学校の学生もサッカー部に所属できる独特の仕組みがあるので、英語を学びながらでもプロを目指せる。例えば大学のサッカー部で頭角を現わせば、カナダからMLS

に参戦しているトロントFC、モントリオール・インパクト、バンクーバー・ホワイトキャップスへの練習参加という道も見えてくる。プロ入りのチャンスは、育成年代を対象とした短期リーグにも転がっている。「MLSのシアトル・サウンダーズやポートランド・ティンバーズのU-23チームも出場しますから」

そこで目に留まれば、のし上がっていくきっかけにできるかもしれない。カナダの大学は新学期が9月に始まり、育成リーグは5～7月にかけて開催される。秋入学から翌年の初夏まで、じっくりと力を伸ばせる時間もある。

英語の勉強も片手間ではない。とりわけ、高尾が紹介可能な国立大学付属の語学学校の場合は――。

「めちゃくちゃ厳しいです。しっかりとした予習復習を欠かすと、授業に付いていけなくなります」

2年間勉強漬けだった自身の体験を踏まえる高尾が、サッカーと英語をセットにしたカナダ留学をお勧めする根拠は、ふたつの大きなメリットだ。

高尾は語学学校を1年で卒業し、大学院でMBA取得に取り組んだ留学2年目に、英語力の飛躍的な伸びを実感する。語学に専念していた1年目との違いが、サッカーだった。2年目は社会人のチームでプレーするようになっていた。

「試合や練習に行けば、周りはほぼカナダ人。英語のネイティブスピーカーだらけになります」

もうひとつのメリットは、学生アスリートを対象とした奨学金制度だ。留学生時代の高尾はこの仕組みを知らず、結局全額自己負担となった。

「カナダの大学はほとんどが国公立です。留学生の学費は税金を払っていない分、カナダ人より高くなります。ところがスポーツ面での貢献が見込めると奨学金の対象となり、審査に通れば学費が大幅に安くなる。ざっくり3分の1程度しか掛かりません」

高尾が紹介する大学の場合は、サッカー部での継続的な活動を条件として、語学学校の学生も奨学金支給の対象となる。

「学生ビザを取って、まずは語学学校に入る。英語をきちんと学びながら、大学や社会人のチームでサッカーをとことんやる」

カナダからは3クラブがMLSに参戦中。14年W杯で日本を苦しめたドログバも、モントリオール・インパクトでプレーした

英語力を伸ばし、語学学校の最上級クラスに上がれば、カナダの大学や大学院進学のための資格も得られる。たとえプロ選手を断念したとしても、学問は続けられる。どの道に進むとしても、人生の可能性は広がっているに違いない。始めたのは、その手助けをする仕事だ。大きなやりがいが高尾を支えている。

育成から代表強化まで見据え 日本人の指導者を招聘したい

上空を見上げながら、高尾は思った。なんでまた、今日に限って……。カナダのバンクーバーは、滅多に雪が降らない都市だ。それなのに、日本から妻子を連れてきたその日に限って、猛烈な寒波に襲われたのだ。空港から市内への公共交通機関であるスカイトレインも、雪の影響で止まっていた。まったく散々だ。

しかし、踏んだり蹴ったりの一日にはならなかった。むしろ大雪のなかの渡航となって、良かったのかもしれない。途中から別行動を取っていた妻の話を聞きながら、高尾は感謝の念に駆られていた。

高尾の妻は大寒波のなか、ベビーカーを押しながら、徒歩で宿泊先へと向かっていた。路面は積もった雪で見えなくなり、クルマの轍（わだち）を通行するしかない。

宿泊先の前まで、ようやく辿り着いた時だった。前方からゆっくりとクルマが近づいてきた。高尾の妻は慌てた。旅の荷物を抱え、ベビーカーには生後8か月の息子が乗っている。民泊を利用したため、ベルボーイの助けはない。家の玄関までは階段だ。運転手はきっと先を急いでいるだろう。クラクションを鳴らされても……。ところが、次の瞬間。

「運転席から男性が降りてきて、荷物とベビーカーを一緒に運んでくれたそうです」

カナダの語学学校には様々なバックグラウンドを持った学生が集まってくる。留学生時代の高尾自身が価値観を大きく広げた

不慣れな異国での、思いがけない親切。

「妻は純粋に感動していました」

カナダで事業を興そうとしている理由は、「スポーツに寛容な文化」がひとつ。治安もいい。アメリカとは比べるまでもない。そしてもうひとつが「人の良さ」だ。初めてカナダを訪れた妻が、初日から忘れ難い体験をできたのも、偶然ではなかっただろう。

今年2月のそのバンクーバー訪問は、永住権取得の準備のためだった。カナダは移民の受け入れに積極的な国だが、条件はある。誰もが気安く応募できるわけではない。

「本当に移民できるのか。もう道がないかもしれない。そんなふうに行き詰まった時期もありました」

永住権の取得はポイント制で、留学の実績だけでは足りなかった。カナダ国内での就業でポイントを上乗せしていく必要があり、高尾は移住からしばらくはそのための仕事をする。大雪のなかのバンクーバー訪問は、職を得るためでもあった。

「永住権の取得まで1年か1年半か、もっと先なのか分かりませんが、しっかり働きますよ」

永住権の取得自体にこだわっているわけではない。その権利がないと、現地で事業を興せないからだ。労働ビザだけでは法人格を得られない。

そうまでして事業を興すのは、カナダへの恩返しのためでもある。バンクーバーにサッカースクールを開き、日本人の優秀な指導者を招聘。カナダ・サッカー界を草の根の部分から改革していく。すでに温めている大きな構想だ。

高尾は不思議でならなかった。カナダには天然芝と人工芝を問わず、充実したサッカー施設がある。人材のポテンシャルでもアメリカに劣っているとは思えない。ところがカナダ代表のワールドカップ本大会出場は、86年大会の一度きり。90年大会から2014年大会まで、自国開催の94年大会を挟み、ずっと北中米カリブ海予選を突破してきた隣国には、大きな差をつけられた。

どこで差がついているのか。高尾が出した答は、育成年代の指導の質だ。大学や社会人できちんとしたコーチングを受けるまでに、他のスポーツに流れていく人材が多すぎる。

「もったいないと思います。ちゃんと教われば、サッカーがもっと楽しく、面白くなるはずなんです」

高尾自身、留学2年目の社会人サッカーで、このスポーツの本質をまるで理解していない、とんちんかんなプレーの多さに驚かされた。

いずれバンクーバーに開く予定のサッカースクールでは、カナダの子どもたちを日本人の優れたコーチが指導する。普及育成とその延長線上にある代表強化。高尾が見据えているのは、カナダへのそんな恩返しだ。

この育成スクール事業は、日本サッカー界への恩返しにもなる。現役引退後の選手が指導者に転身する際の、セカンドキャリアの受け皿にもなるからだ。高尾が斡旋する留学でしっかり英語を身につけた日本人選手が、やがて指導者としてカナダに戻ってくる展開もイメージしている。

当面は、日本で立ち上げた法人でサッカー&語学留学の斡旋に全力を尽くしながら、その他の様々なプランも実現していくつもりだ。

「カナダでの短期合宿を希望するサッカーチームのお手伝いや、向こうはスポーツ医療が進んでいるので、未来のドクターやトレーナーのための体験カリキュラムのコーディネート、北米はスポーツビジネスの本場ですから、日本人にその研修先も紹介していきたい。奨学金をもらえるスポーツ&語学留学では、女性アスリートへの斡旋もしていきます」

ちなみに、なでしこリーグのちふれASエルフェン埼玉が、7月13日に獲得を発表した新外国人選手はカナダ人。この移籍でJFA登録仲介人としての最初の実績を作った高尾は、「例えばカナダのサッカー少年団を、いずれ日本に送り込む」そんな懸け橋にもなっていくつもりだ。

視野を広げ、様々な価値観を選択肢を増やす入口を用意

サッカーは小学4年で始め、中高の6年間は現在のジェフユナイテッド千葉のジュニアユースとユースでプレーした。謙遜もあるのだろう。スタミナだけが取り柄の平凡な選手だったと振り返る。専修大学入学後は部活動で競技を続け、卒業後に留学したカナダでの1年目はサッカーとは距離を置いた。

経営学修士のMBA取得は、突き詰めれば稼ぎのいい仕事に就くための手段だった。人生カネだけではないと、価値をはかるモノサシが増えていったのは、ビールを飲みながら庭いじりをする男性を通りすがりに見てからだ。幸せの形は、いろいろあっていい。ダイバーシティという言葉を知る前から、そんな思いを秘めてきた。だからこそ――。

「とくに若い人たちには、日本に留まっていてほしくない。カナダは移民の国なので、いろんな価値観の人がわんさといるわけです。世界に出て行けば様々な文化があり、日本とは違う国の人たちが何を考えているか、日本がどう見られているか、肌で感じられます」

寮生活を送っていた語学学校時代は、隣室に中近東からの留学生がいた。日中は水も飲まないラマダンという宗教的義務があり、王族の血統に生まれない限り、いくら足掻こうと、のし上がれない。そんな国も本当にあるのだと実感できた。

「留学の面白さは、実際に経験してみないと分かりません」

視野を広げ、様々な価値観を知り、人生の可能性と選択肢を増やしてほしい。

「英語力を高める以上の留学の意義が、そこにあるのかもしれません」

高尾はその入口を用意する。

「あらかじめ道を作っておくつもりも、雨露をしのげる屋根をかけておくつもりもありません。カナダにスムーズに入って行ける入口です。そこからは留学する本人が地に足をつけて、周囲に根を張っていく。そうしているうちに人との繋がりができてくる。築いた個人的な人脈は、掛け替えのない財産になりますから。サッカーを続けていくうえでも、充実した人生を歩んでいくためにも」

◇

川崎フロンターレへの入社は、はたして偶然だったのか。高尾の話を要約すると、経緯はこうだ。「MBAの卒業論文には3か月のインターンシップが必要で、その受け入れ先となってくれたのがフロンターレでした。インターンシップを終えた後は、3か月のアルバイトを経て社員になりました」。留学時代の当初にイメージしていた外資系の証券会社でも銀行でもない、スポーツを通じて地域の人々を幸せにする仕事。偶然の入社ではなかったに違いない。

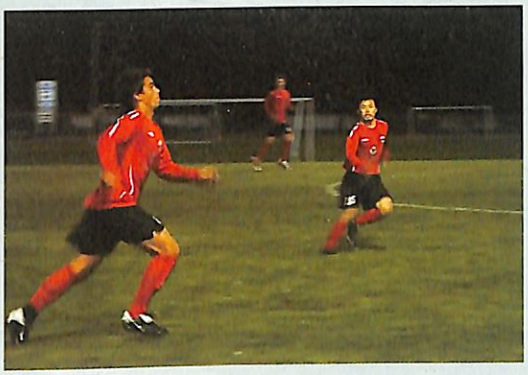
運営部で4年、プロモーション部で3年、社員としては7年間を過ごした川崎フロンターレでも――。

「やっぱり人でした。物事は人が動かしていくものだし、人との繋がりでいくらでも切り開ける」

プロモーションの達人の異名を取る天野春果（現在は東京オリンピック・パラリンピック大会組織委員会に出向中）の下で多くを学び、13年に現役を引退してフロント入りした〝ミスター・フロンターレ〟伊藤宏樹ともコンビを組んだ。「まず宏樹さんありきの、宏樹さんがいないと絶対にできない」イベントを一緒になって捻り出し、ゼロから企画を生み出す面白さに目覚めた。「既成ではない、自分にしかできない」カナダでの事業を進めていくにあたり、フロンティアを開拓していくパイオニアという自負もある。

取材を終え、スポーティな自転車で去って行く高尾の背中をしばらく眺めていた。すでに進み始めているのは、前人未踏の道。急な坂道やオフロードも少なくないだろう。そして雪道も。願わずにはいられない。勇敢な挑戦者にどうか幸運を――。

（文中敬称略）



英語力の伸びを実感したのがサッカーを再開した留学2年目。スポーツと語学をセットにする理由がそこに

FOOTBALL マイノリティリポート 連載

留学の面白さは実際に経験してみないと分からない。視野を広げ、人生の可能性と選択肢を増やしてほしい。そんな願いとともに起業に踏み切った